

平成 28 年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に係る 実践研究報告書

研修機関 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース
高知県立高知南高等学校 教諭 池上 真美

1 研究の成果と課題をふまえた平成 29 年度の実践内容

(1) 平成 28 年度の研究の成果と課題

大学院派遣期間中の研究テーマは、「中高一貫教育校における教職員の協働組織の形成ーサーバントリーダーシップによるチームづくりー」であった。

研究の中では、成功しているチーミングに伴う行動が「①率直に意見を言う、②協働する、③試みる、④省察する」であることや、サーバントリーダーシップは「①傾聴、②共感、③癒し、④気づき、⑤説得、⑥概念化、⑦先見力、予見力、⑧執事役、⑨人々の成長に関わる、⑩コミュニティづくり」という 10 の属性に整理されることなどについて知見を広めた。

また、実践研究を通して、中高の教職員が話し合う「場」づくりの重要性を改めて認識するとともに、所属校のようにその「場」の回数を増やすことが難しい場合は、限られた回数の中で質の向上が求められるという課題が見えてきた。

さらに、若年教員の育成に関わったことで、チームの総合力を高めるためには、リーダーという立場のあるなしに関わらず、日常的にサーバントの視点でリーダーシップ行動を維持できるようにすることが必要だという今後の課題も明確になった。

(2) 平成 29 年度の実践内容

平成 29 年度は、所属校でキャリア担当としての業務を行った 1 年であった。

所属校は、平成 19 年度からの 3 年間、文部科学省から「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」の指定事業を受けている。また、その後も、「平成 25 年度高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究指定校」となり、体験的な学習を核としながら、中高一貫教育校における系統的なキャリア教育を再構築することに取り組んできた。

それらをふまえたうえで、キャリア担当として日常的に取り組んだのが総合的な学習の時間の運営である。特に、高校 1・2 年については、昨年度まではなかった授業の細案とワークシートを毎時間作成し、学年全体で足並みを揃えた取組ができるようにした。それらを作成する際に心掛けたのは、生徒自身に見通しを持たせることである。ワークシートには、学習の目的や本時の流れ、今後の日程、振り返りを必ず入れるようにした。そうすることで、教員が指示しなければならないという学習形態から、生徒自身が考えて行動できるような学びへとできるだけ転換していった。

また、授業の細案づくりにあたっては、実際に授業をするホーム主任・副主任に意見を聞きながら、生徒の学習効果と教員の負担とのバランスについても見直しを図っていった。安易に「昨年どおり」とせずに、さまざまな意見をふまえて運営した方が、協働組織の形成につながると思ったからである。

総合的な学習の時間の運営に直接関わった学年は高校であるが、中学校については、3学年とも毎週参観に行き、写真等で記録を残していった。中学校の進捗状況や生徒の様子を把握することで、来年度以降の高校の取組に生かしていきたいということと、中学校から高校への学びがより系統的なものになるように6学年全体を見直していきたいという目的があった。

また、本年度は、「平成29年度カリキュラム・マネジメント研究事業」も担当した。指定事業としての県外視察では、指導主事が常駐している静岡県の富士市立高等学校を訪問し、横断的・系統的なカリキュラムの構築や、総合的な学習の時間の各單元における探究学習の進め方などについて学んだ。総合的な学習の時間のための教員の打ち合わせ会が時間割に組み込まれていることなど、学校全体でカリキュラム・マネジメントを意識した取組が行われていると感じた。視察当日は、総合的な学習の時間の発表会もあり、生徒の取組の様子や相互評価の観点などを知る機会も得た。また、指導主事が生徒を引率したり直接指導したりすることや、そうすることで生徒と教員、学校と企業や地域をつなぐ役割を果たしていることなど、本県とは異なる業務を担っていることもわかった。

県外視察については、探究型学習に係る先進校視察として、鳥取県立米子東高等学校および鳥取県立米子西高等学校の訪問もした。学校内外の施設・設備の充実や効果的な活用はもとより、教諭や実習助手のそれぞれの専門性を生かした連携した授業づくりなど、生徒の学びを深めるために学校全体で取り組んでいる様子を知ることができた。

これらの1年間の実践や県外視察の内容をもとに、来年度に使用するキャリアワークシート冊子および生徒の自己管理用の手帳の改訂を進めている。

2 平成29年度の実践の成果と課題

平成29年度の成果としては、中高6学年の総合的な学習の時間に関わりながら、各学年団の意見を聞くことができたことである。所属校の総合的な学習の時間は、前年度のうちに計画ができていたため、本年度はそれに従って細案を立てながら、その都度ホーム主任・副主任の意見を聞き、次年度への課題を校務分掌内で共有していった。それらをふまえて、来年度の総合的な学習の時間の年間計画を見直したり、前項で述べたようにキャリアワークシート冊子等の改善を行ったりしている。また、その中で、総合的な学習の時間に協調学習を取り入れることや、ICTの活用の幅を広げていくことも検討している。

生徒の実態をよく理解しているのは、身近なホーム主任・副主任である。目の前の生徒たちを育てたい生徒像に近づけていくためにはどうすればよいか。今後も教職員間で協働していくためには、学年会などの話し合う「場」で出されたさまざまな意見に傾聴しながら、率直に意見を言ってもらいやすい自分自身であり続けることが重要だと考えている。意見を受け止めたり、できるだけその意見を反映させたりすることで、ともに運営に参画しているという意識の輪が広がっていけばいいと思う。

本年度の取組として不十分であり、今後の課題としても残っているのは、生徒の学びや学校の取組を横断的・系統的に可視化できるようにしていくことである。所属校の核の一つとなっているキャリア教育において、総合的な学習の時間と他の教科との結びつきは欠かせない。それを誰が見てもわかるようにしておくことが、生徒と教職員が思いを一つにして同じものを目指すことにつながると考える。サーバントの視点で人のためにできることを今後も追求していきたい。